



優秀賞

## 「私の建設業に対するイメージの変化」

東海工業専門学校金山校 測量設計科1年  
渡瀬 巧 巳

私の祖父と父は土木施工会社で働いており、今父は自分で会社を立ち上げ、同じく土木施工の会社を経営している。そのため、小さな頃から重機やその他建設機械が身近にある環境の中で育った。高校のころから、父の行く現場についていき簡単なお手伝いをさせてもらうことも多々あった。

しかし、高校卒業時の私は、建設業とは全く関係のない仕事に就こうと考え、大学も建設業とは無縁の学部を選び入学した。やはり建設業といえば、3K職種と言われ、実際に私も父や祖父を見ていてそんなイメージを強く抱いていた。だからこそ私は、絶対建設業には就かない、大学四年時の就職活動の時もそう思っていた。しかし大学を卒業する頃、思いもよらないことから父の経営する会社に入社することになり、建設業に従事することになった。

土木の仕事をするようになり、確かに体力的にとってもきついことも多く、泥や油等で汚れること、自分のすぐ隣を重機やバケットが動くことで、身をもって3Kと呼ばれる所以を体感した。

しかし、就職前から思っていたような建設業に対する悪いイメージが全てではないことにも気づかされた。確かにきついことや汚れることも多くあるし、時には危険だと感じるような場面もあるが、その分得られることも多く、達成感などを味わえる場面も多い仕事だということにも気づいたが、その反面難しいこともたくさんあった。

まず、この仕事を初めて気づいたことは、同じ現場で働くほかの人や、周囲の状況を常に確認しその先を考えて動かなければならないことだった。同じ現場内、複数の人で一つの構造物を作り上げるという性質上、他の人がどこでどのような作業をしているのか、機械や車輛がどこでどのように動いているのか・動こうとしているのか、そのうえで自分はどこでどの様に動かなければならないのかを常に考えながら仕事に当たらなければ、工事が進まないばかりでなく、自分が命にかかわるような怪我を負う場合や、最悪の場合他の人を巻き込んだ事故につながるような危険性もある。最初は、この常に考えながら先を見越して動くことができずとても苦労した。しかし、この力は日常生活やその他の場面でも生きてくる力だと私は考えている。

また、自分が関わった工事が完成した時、構造物が一つ完成した時にはとても大きな達成感が得られる。完成し、終了した現場付近を通った際、その現場を見かけるたびに何度でも達成感がわいてくる。また自分のした仕事が地図等に残ることもとても誇らしく感じられる。

また人が生活をしていくうえで必ず必要になる職業である。道路、水路、河川堤防など人々の生活とその安全に貢献できる職業である。

悪いイメージや評価が多いのが建設業界の現状ではあるが、そのイメージの通りではないことが、自分が実際に働くことで分かった。生きていく力が身に着けられ、人々の生活の基盤となる道路や河川堤防などを作ることで社会に貢献し、それが数年後、数十年後まで残る素敵な職業だと思う。

一度は嫌だと思った職業だったが、働くことでその良さを実感し、もっと活躍できる、社会に貢献できる人材になることを目指して知識等を身に着けるため、4月から専門学校に通っている。まだまだ知らないことがたくさんあり、今までかかわってきた工事の仕組みが改めて理解でき、新しい知識が次から次へと入ってくるのでとても楽しく勉強ができていく。

まだまだ世間一般では3K職種だと言われ、評価の低いことが知られている現状で、確かに危険なことなどもあるが、人々が生活するうえで必要不可欠な仕事であり、今後も必ずなくなることは考えられず、長きにわたって社会に貢献できる素敵な職業だと私は考える。